

東アジア日本語教育・ 日本文化研究学会報告

213

新羅大学院特別教授 藤井茂利

籍

22年の学会の講演の途中10分ばかり余談をして万葉集巻

5の音仮名「阿」の使用について話が及び尚も続けたく思ったが、『賜』の文字使用のことに講演の内容が及ぶ」とオンラインで追加表明しているの

で余談を打ち切り「賜」の漢字について話すことになった。

「賜」の漢字は「大漢和辞典」(大修館書店)によると

①たまふ④与える⑤ほごす⑥めくむ⑦いたす⑧いひける。命令する

⑨つぎる
とあり、凡そ90語の熟語が示されている。

その中の例として、二例のみ示すと、

賜謁 天子が謁見をたまふ

こと

賜書 君主から賜はった書

など見え、与える人物は「天子」或いはそれに近い人物となっている。

「漢語林(大修館書店)」には

①たまふの目上の人から下の者に与える与える。④ほごす。⑥めくむいひける。

②たまわるいたたく。ちよつだいする。

③たまもの。いただきもの。

とあり「解字」に貝+易。音符の易は、堤に通じ、脱をつきだすの意味。目上が目下に金品をおしやうて与える、たまふの意味を表す。との説が見える。

日本語の文法の用法の中には韓国語と類似している例が見られる場合がある。次の場

合がそれである。その例

日本語 先生が来る。

先生が来(ら)れる。()

韓国語 先生 O (si) da

ローマ字の部分は(ハングル)

参考のため中国語は

中国語 先生 来了。

(老師) 来了。

となって述語の所には尊敬

字はなく主語の部分に「先生

の尊敬語「老師」が用いられている。日本語、韓国語との用法が根本的に異なっている。

古代日本語を表記した渡来人の中に中国系の人物がいた

であろうとの説を出す研究者がいるがそれはその分野の場合の叙述の場合で、今回のような尊敬辞の用法の場合ではないと言えらる。

尊敬の用法のような凡そ語法に関する用法は古代から

継続して今日に至るものであり韓国語の尊敬辞「si」は古代の用法の継承と考えられる。

ハングルのない時代、このよ

うな尊敬辞「si」の表記はどのようなにしたのが問題であるが古朝鮮の新羅国では漢字の音を借りて「si」を表記している。

漢字の音で「si」の音のある

漢字は凡そ30字近くあって、ど

の漢字を使っても、と読めば尊

敬の用法として使用されること

になるが「賜」の漢字、音は

「si」の漢字が使用されている。

「賜」の漢字前述の通り「天

子」が物を与える時に使用される用法となっており、高貴な人物の行動とされている。

同じ「si」という文字を使用

するならば矢張り高貴の人物に関わりのある文字を使用するのが良いとの思惑があつて「賜」が選ばれたものと考えられる。

古朝鮮の新羅の時代に作ら

れたと言われる「郷歌」の歌詞に「賜」の漢字が用いられている。

臣隱愛賜尸母史也 (安民歌)

とあるが「愛賜」の「賜」は物

品を与えるとの意味でなく「愛される」の意の尊敬の辞の表記である。

「臣は(民を)愛される母である」の意である。「賜は(臣)の行動に対する敬意であると考

えられる。

郷歌に使用された「賜」は安

民歌(その他「法界滿賜仏佛」礼

敬諸佛歌)の「法界に満ち給ふ

佛体」と小倉進平博士の訳のある歌の他14例が見えている。

郷歌ばかりでなく朝鮮漢文

と言われている新羅で書かれた漢文にも、

成吉令賜之(成造せられた

思行大角干爲賜(思行大角

干がなされた)

(見やせたる)

などの他8例の「賜」が尊敬の補助辞として使用されている。

日本よりも古い時代に「賜」の補助辞が使われていたことが判る。

日本の場合については別に

説明する必要がある。